

## 第18話 尊王論の勃興

学問が復興して、国文、国史の研究が進むと共に、世人は漸くわが国体の  
 本義に目覚め、武家政治が変態に過ぎないことを知って、尊王の大義を唱えるよう  
 になる。

## 朝廷と幕府との関係

そもそもわが国は、万世一系の天皇が政治を自らされるのを大法としていた。この事は第1巻以来、既にしばしば述べましたし、読者もよくご存知のことで、改めて繰り返す必要はありません。しかし、当時の江戸時代の国民は、そのようには知っていませんでした。

いや、彼等の多くは、将軍が無限の権力を持って天下に臨むのを永く見ていたので、いつしかこれに慣れて、武家政治に対して少しも疑いを持たなかったばかりか、中にはただ将軍のいるのは知って、皇室の尊厳な所以を知らない者が多かったのです。

ところが、一旦学問が復興して、国史・国文の研究が起こり、大義名分が明らかになると共に、武家政治が我が国体に悖った1種の変態（訳注：正常でない形）であることが分かって来ると、久しく無理におしつけられて国民の心の奥に潜んでいた尊王思想が、掘り起こされた泉のように俄かに滾々と湧き出したのです。

## 尊王論者の先駆

さて、尊王論者の先駆としては、第1に先づ水戸光圀が挙げられるのが普通です。彼が『大日本史』を編纂して大義名分を明らかにして、ひそかに尊王論の種を蒔いたことは、すでに詳しく「徳川光圀と大日本史」の話で述べておきましたが、その光圀と同じころに、山崎闇斎もまた京都に在って尊王の大義を説き、神道を唱えて盛んに弟子を養成したのです。闇斎は65才をもって天和2年9月に、五代将軍綱吉の時に没したが、それから凡そ50年の後に、彼の学説を奉じる者から初めて公然と尊王論を唱えて、倒幕の声をあげた者が出ました。すなわち、竹内式部です。

## 竹内式部

式部は越後（新潟県）の人で、京都に出て、山崎派の学を修めて、深く皇室の式微を慨いていたが、将軍家重の頃に、ついに塾を開いて熱心に尊王の大義を説いた。権大納言徳大寺公城を始め、朝臣らでその門に学んだ者も多かったが、式部は彼等に向って次のように教えたのです。

曰く、「日本で天皇ほど尊い方は無いのに、将軍を尊いと言う人は有りながら、天皇が尊いことを知らない理由はなぜでしょう。これは代々の天皇も学問が足りず、臣下も、関白以下が何れも不徳無才だからです。天皇と諸臣一同が学問に励み、五常の道を備えると、天下の万民は皆その徳に服して、天皇に心を寄せ、自然と将軍も天下の政治を返上するにきまっています」と。

この言葉を解いて見ると、明らかに尊王の鼓吹ばかりではなく、大政奉還、即ち王政復古の鼓吹で、

## 第18話 尊王論の勃興

その道筋をさえ示しているのがわかります。

彼はまた、「故にこの君（天照大神のご子孫の大君）にそむくものがあれば、親兄弟たりとも、則ちこれを誅して君に帰するのがわが国の大義である」と、暗に倒幕の鼓吹をさえ正々堂々と筆にのぼせたのです。

時の天皇は、第116代 桃園天皇で、特に学問を好まれて、近臣も多くは式部の門人であったので、ついにこの人々から式部の説は天聴に達し、天皇も深くその説に御心を寄せられた。

### 宝暦事件

この事がやがて幕府に聞こえたので、宝暦4年（西暦1754年）6月、式部は所司代に捕えられて取り調べられ、彼の講義を聴いた朝臣14人は、その官を免じ、或いは蟄居を命じられた。式部もまた翌9年5月になって、京都を追放されて、畿内近国、江戸近国、生国越後などには住むことを禁じられた。世にこれを宝暦事件といっています。

それで、式部は、その後は伊勢の宇治（今の伊勢市宇治山田）に住んでいたが、それから8年を経た明和4年に、江戸に召喚され、追放後に京都に立ち入ったのが不届きであると、八丈島に流されることになり、その途中、船中で病気に罹って、三宅島に寄港した時に、12月5日に56才で没した。しかしどうしてまた、8年も経ったら普通は黙許されるのが慣例となっていた微罪で、遠島などになったのかというと、それには山縣大貳の明和事件が関係しているのです。

### 山縣大貳

大貳は甲斐（山梨県）の人で、やはり闇齋学の流れを汲んだ学者です。将軍家治の頃に、江戸に出て兵学を弟子に教えていたが、折柄、幕府は田沼意次の悪政時代で、上下共に奢侈贅沢を事としていたので、大貳は京都の衰微と思ひ比べて大いにこれを慨き、『柳子新論』を著して、鎌倉時代以来、朝廷は衰えが甚だしく、天皇は幽閉にも等しい身の上におられると、はげしく変態の武家政治を攻撃して、さかんに尊王の大義を説いた。

式部が京都でしたのとはちがって、これは将軍の膝元である江戸でのことなので、大貳はよほど識見も高く、自信も強く、又、大胆でもあったのでしょう。彼の許に来て学ぶ者は日に多かったが、中でも上野國小幡の城主織田信邦の老臣吉田玄蕃の如きは最も大貳を尊信していたので聞こえています。

### 藤井右門

この時、京都から下った大貳の許に寄寓していた藤井右門もまた、同じ思想をいだいて大貳の説に心服していたが、右門は更にその説を実際の地理に引き当て、甲府や江戸の攻撃法も説いたりした。

### 明和事件

とかくするうち、たまたま吉田玄蕃と同藩士の相原郡太夫と言う者が、玄蕃が大貳から箱根山の攻撃法を詳しく説明されて感心したのを知って、玄蕃は大貳と共に謀反を企てていると藩主に讒したので、

この事がもととなって、間もなく大貳も右門も幕府に捕らえられた。詮議の結果、謀反などはもとより無根の事だが、平生から尊王思想を鼓吹して、将軍政治を斥けていたことは事実だったので、ついに大貳は斬られ、右門は獄門にかけられた。第 117 代後桜町天皇の明和 4 年（西暦 1767 年）8 月のことで、大貳は 43 才、右門は 48 才でした。明和事件とは即ちこれです。式部はこの事件とはもとより直接には何の関係も無かったのだが、彼もまた尊王論者でしたので、幕府に忌まれて遠島に処せられたのです。

### 国学の勃興と尊王思想

この様に、天下に率先して尊王の大義を唱えたものは、忽ち重い罪科に処せられたので、その後は、公然と幕府の不義を論ずるものは無かったが、しかし、一旦頭をもたげた尊王思想はもはや抑え得るべくもなかった。更に国学の発達につれて、ますます広くひろがった。とは言え、国学者らもまた、初めは幕府の忌諱に触れる危険を避けて、表面はただ国文・国史の研究に没頭しながら、ひそかにその精神を著述の上に著すに止めていたが、後には次第に我が国体の美を唱道して、国民に一般に大義名分のゆるがせない事を悟らせ始めました。

国学の発達および国学者の活動に就いては、すでに前話にその大要を話した。そのうち荷田春満、加茂真淵らは式部、大貳らとほぼ時を同じくして出て、本居宣長、塙保己一、平田篤胤らはやや遅れて出たのです。真淵、宣長らが国体の尊厳を説き、篤胤が一步を進めて、さかんに尊王愛国の精神を鼓吹したことも、すでに前話に述べた通りです。そうして、保己一が集めた古書の刊行によって、国学の知識が一般に普及するに及んでからは、国史・国文の研究が次第に尊王論の主力となって行きました。

こうして、式部、大貳らが処刑されてから 30 年と経たないうちに、早くも公然と勤王論を唱えるものが民間にも出るようになった。中でも寛政の頃の高山彦九郎、蒲生君平の人たちは、その最も名高い人です。

### 高山彦九郎

高山彦九郎は、名は正之、上野国新田郡の人です。13 才の頃に『太平記』を読み、楠木、新田などの忠臣の行いに感じて、忠義の志を深くした。長じて後、武者修行にならって、学問、徳行のある人々を尋ね歩こうと思ひ立ち、西に東に広く全国遍歴の旅を始めた。彼は至るところで、苟くも名のある人々には面会を求めて交わりを結び、身の修養に資すると共に、常に尊王の大義を説いた。その途次で、京都を過ぎる時には、必ず御所の門前に至り、地上に跪いてこれを拝し、謹んで皇室の尊厳を仰ぐのを常としました。

### 皇居の炎上と彦九郎

天明 8 年の正月、京都の大火で、皇居もまた火災に罹った時の事です。折柄、彦九郎は上野に帰っていたが、はるかに大火の由を聞くと、心配のあまり、直ちに出發、夜を日についで京都に馳せ上った。彼が朝廷を思い奉る志の厚いことは、これにて知られます。

この時、木曾街道の山中で、夜、突然、抜刀で襲いかかった山賊らを彦九郎が叱咤して、戦慄させた話は、今も世に名高い。彼が目を瞑らして、「汝は上野の高山彦九郎を知らないか。今、京都に大火があると聞き、御所の安否を気遣って馳せ向うところだ。命ばかりは助けて遣わす。邪魔をひろげずに逃失せよ」と大きな聲で怒鳴りつけて、度肝を抜かれた山賊らが、ぶるぶるしているのを 2 度とは見ずに、悠々と先を急いで行く彦九郎の姿が今も目に髣髴として浮かんで来ます。

なお、この大火の後に、間もなく松平定信が造営総裁となって、以前よりも遥かに立派な皇居を造営したことは、既に [松平定信の執政] の話に述べた通りです。彦九郎もこれにはさぞ満足したでしょう。

### 無上の光栄

それから 3 年して後、即ち、寛政 3 年の春のころに、彦九郎はまた京都にのぼっていたが、ある日、賀茂川の岸で緑色の房のついている亀を見つけ、これこそ皇室ご繁栄の兆と打ち喜んで、公家の手を経て、光格天皇のご覧に供した。その際、彦九郎は夜中ひそかに宮中に召し出されて、天顔を拝する光栄に浴し、この無情の名誉を喜んで、我を我としろしめすかや天皇の玉の御聲のかゝるうれしさ  
と詠んだ。

こうして彼は大いに事を成そうとして、その後も諸国を遍歴していたが、事が思うようにならなかったため、ついに寛政 5 年 6 月 27 日の夜に、筑後の久留米市郊外櫛原村の森嘉膳という人の家で自殺した。時に年は 47 才でした。墓は今も久留米市内の遍照院に在ります。

### 寛政の 3 奇人

実に彦九郎は忠義一途の人で、朝廷のご威光の衰えたのを慨くあまり、しばしば人の驚くような事をも平気でしたので、次にお話する蒲生君平、林子平と共に、寛政の 3 奇人と言われています。京都の三條の橋の上に跪き、はるかに皇居を拝して涙を流しながら、「草莽の臣高山彦九郎、只今参上」と我が名を名乗ったのや、等持院の足利尊氏の像を鞭打って、その罪を数えたのなども、その 1, 2 の例として伝えられています。

蒲生君平は、名は秀実、下野国宇都宮の人です。幼少の時から学問を好んだが、ある時、祖母から自分の家は蒲生氏郷の末裔であることを聞いて、大いに志を起し、その後は日夜読書に耽り、外出する時も、歩きながら書物を読んだほどでした。

### 蒲生君平の山陵志

こうして広く和漢の書を読むに及んで、朝廷の久しく衰えたことを慨いていたが、殊に歴代の御陵の荒れ果てているのを悲しみ、33 才の時 -- 寛政 12 年 -- に京都にのぼって、畿内地方をめぐり、神武天皇の御陵を始め、数多の御陵を調べ、更に遠くは讃岐(香川県)の崇徳上皇、佐渡の順徳上皇の御陵にも参拝した後、37 才の時に江戸に移り住んで、『山陵志』の著述に従事した。しかし、もとより貧

## 第18話 尊王論の勃興

しい身の上で、其の日の生活にも困ったので、夜は按摩を業としたりして、わづかのお金を得ながら、ついにその書物を作りあげた。そしてこれを朝廷および幕府に献上して、御陵の修復を一日も早くされるように願った。実に光格天皇の文化5年で、君平が41才の時です。

### 君平の海防論

たまたまロシア人が樺太および千島の辺に来寇して、俄かに北辺が騒がしくなったので、君平は憂国の余り、新たに『不恤諱』という書物を著して、これを幕府の老中に奉って大いに辺防の事を議した。ところが、幕府は先の『山陵志』といい、今また『不恤諱』といい、その職にないのに国事を議するのは不埒であるとして、君平を処罰しようとした。幸いにも時の大学頭林衡(述斎)が、かつて君平を師として教えを受けた人でしたので、君平のために弁解してくれたので、僅かに処罰を免れた。

それで、その後は、閑居して著述に従い、文化8年には『職官志』を著して古来の制度を明らかにして、なお静かに著述を続けていたが、同10年7月、病に罹って亡くなった。時に年は46才でした。墓は東京台東区谷中坂町の臨江寺にあります。

### 君平の奇行

君平にもまた、奇行として伝えられるものが頗る多い。中でも、楠木正成を真の忠臣ではないと言っているのを厠(便所)で聞いて大いに怒り、いきなり出て来て、厠の中の団扇を揮って盛んに論駁しながら、一座を臭気で満たした話や、鍋の蓋の上に我が北地の形成を描いて、ロシア人の来寇と国防の急務を論じながら、ご飯の焦げたのに気がつかなかった話などは、殊に世に聞こえている。

3 奇人の1人の林子平は、最も海防に関係の深い人ですから、次の「外国船の来航と海防」の話に譲って、ここではもう1人の尊王論者の事をちょっとお話します。それは外でもない『日本外史』の著者の頼山陽です。

### 頼山陽

山陽は名は襄、安芸(広島県)の藩主浅野家の儒臣頼春水の子です。寛政4年、13才の時に詩を作って、折柄、江戸の藩邸にいた父の許に送ったのを、寛政の3博士の1人である芝野栗山が見て大いに歎賞した話がある。幼少の時からよほどの俊才であったことがわかる。この時、栗山が、この子には宜しく歴史を読ませて、古今の事を知らしめるがよい、と言ったのを山陽が聞いて、大いに感激して歴史に志したと伝えられる。

### 日本外史と日本政記

18才の時に江戸に出て、尾藤二洲の門に入ったが、居ること僅かに1年にして、翌年広島に帰り、32才の時(文化8年)に京都にのぼって、塾を開いて多くの門人を教えた。1世の大著である『日本外史』に着手したのは、既にこの以前からでして、出来上がった文政9年までには、実に20余年の苦心が積み重ねられたのです。全てで22巻。源平両氏の起こりから徳川家斉に至るまでの武家の興亡の歴史を説いて、政権が武家に移った由来を論じ、その間、痛快な批評を加えて順逆を明らかにしている。

## 第 18 話 尊王論の勃興

又、この書と併称される『日本政記』は、彼が晩年に、病をつとめて作ったもので、すべてで 16 卷から成り、神武天皇から後陽成天皇に至るまでの政治の歴史ですが、殊に力をいわずの南北朝問題に注いで、南朝の正当な所以を明らかにして尊王の意を寄せています。

彼の文章は至って明快で、精細に富んでいたのも、これらの書物はいづれも広く世人に愛読されて、国史の知識を普及すると共に、頗る人心を動かした。

山陽はまた母に孝養をつくしたのでも聞こえているが、惜しいことに、天保 3 年 9 月、病のために母に先立って没した。時に年は 53 才でした。墓は京都東山の長楽寺に在ります。

### 尊王論の影響

このように、すでに尊王論は公然と唱えられてはいたが、しかし、当時はなお幕府の全盛時代でしたので、まだまだ一世を動かす力はありませんでした。ところが、やがて幕府が外交問題に躓くに及んで、所在に讓位論が起こると、それと合して幕府を倒す原動力となることになりました。

そうして、後に王政復古の大業が成ったのは、実にこれらの人々の苦心に基づくところも少なくなかったのです。それで、明治の代になって、朝廷は彼等の功を認めて、式部、大貳、右門、彦九郎、君平、山陽らにおのおの正四位を贈りました。

( 第 18 話 尊王論の勃興 終わり。 次は前頁に戻り、第 19 話 外国船の来航と海防 )